

IV-19 遠野エコミュージアム基本計画策定のための基礎調査について

岩手大学 学生員○小笠原 崇
 岩手大学 正 員 安藤 昭
 岩手大学 正 員 赤谷 隆一
 岩手大学 正 員 南 正昭

1. はじめに

観光客の誘致を目的とするものではなく、歴史、動植物などの自然環境、地域に伝わる伝統文化などを地域住民が学習する場を提供し、それらを後世に伝えていくエコミュージアム構想は、独自性のある地域をつくり、地域社会の発展につなげる新しい地域振興策と考えられる。

本研究では、遠野エコミュージアム計画策定に向けておこなった基礎調査についての展開手法をまとめ、その調査から得られた情報より遠野エコミュージアムの方向性を提案する。

2. 研究の方法

本研究では、遠野エコミュージアム計画の策定に向けて、遠野市の風土イメージを把握するため、言語記述法、マップ描画法、景観写真の分類・評価、制限連想法の4つの手法でイメージ調査をおこなった。次に、現在の遠野市民のレクリエーション行動を把握し、エコミュージアムの領域を検討するため、レクリエーション行動実態調査をおこなった。また、自然遺産の重要性に着目し、エコミュージアムの構成要素となりうる動植物の把握と遠野市民の自然環境への意識の把握をするために動植物に関する意識調査をおこなった。表1に調査期間、調査手法、配布数、および有効回答数を示す。

3. 風土イメージについて

(1) 言語記述法によるイメージ再生調査

「遠野市をイメージしたとき、心に鮮やかに思い浮かぶもの」を自由記述形式にて調査した。再生された5441要素は遠野市のイメージの基礎となる。同時に、遠野市の好きな景色・好きなのところについての質問をおこなった。

遠野市のイメージは、1位「しし踊り（78.0%）」、2位「遠野祭り（76.9%）」、3位「遠野物語（71.4%）」、4位「曲り家（65.2%）」、5位「カッパ（63.7%）」と続き、伝統・文化に関するイメージが住民に深く浸透していることがわかった。一方、好きな景色・好きなのところに関しては1位「荒川高原（22.2%）」、2位「鍋倉山（19.1%）」、3位「高清水高原（16.0%）」など、山や高原といった自然が上位にあげられ、総再生数2030個中、

1525個が自然に関する要素であった。伝統・文化の継承には意識が高い一方で、日本の原風景とも評される遠野市の自然については、好きな景色・好きなのところとしてあげられているものの、遠野市のイメージとして定着しているものが少なく、貴重な自然遺産を守っていくことが、エコミュージアムの最優先課題であると考えられる。

(2) マップ描画法によるイメージ再生調査

言語記述法ではイメージされにくい要素（道路や固有名称のない要素）と遠野市民のイメージの空間的な広がりを把握するため、マップ描画法によりイメージマップ調査をおこなった。

再生要素は、観光施設や公共施設が多く、市の中心部に集中しており、山間部やその周辺の自然が豊富にある地域についてのイメージが少ないことより、住民に地域の自然遺産の存在が認知されていないことがわかる。この結果から、貴重な自然遺産に関する情報を住民に発信していくことが必要である。

(3) 視覚的イメージ調査

遠野の景観写真を用いた分類・評価実験により、景観の視覚的な評価をおこなった。表2に景観区分および景観パターンの評価値を示す。

景観パターン別の評価をみると、「伝統家屋」、「河川、溪流、湖沼」、「市街地河川」の評価が高く、これらの写真にある自然景観や伝統的な景観を意識した整備は、エコミュージアムに伴う整備をおこなう場合の検討資料となる。

(4) 制限連想イメージ調査

遠野市の自然環境のイメージを明確にするために、言語記述調査にて再生された自然に関連する要素から、刺

表2 景観区分および景観パターン

| 景観区分 | 景観パターン | 評価値 | 評価順位 |
|-------------|-------------------|--------|------|
| 水辺景観系 | 河川、溪流、湖沼 | 0.1907 | 2 |
| | 市街地河川 | 0.1877 | 3 |
| | 橋梁 | 0.1519 | 6 |
| 農地景観系 | 田園、牧野、眺望 | 0.1496 | 7 |
| | 生産地景 | 0.1063 | 12 |
| | 聖地景観 | 0.1309 | 10 |
| 道路景観系 | 街路、幹線道路 | 0.0904 | 14 |
| | 郊外道路 | 0.1398 | 8 |
| | 社寺、碑 | 0.1732 | 5 |
| 歴史、伝統、文化景観系 | 伝統家屋 | 0.1936 | 1 |
| | 歴史的建築 | 0.1338 | 9 |
| | 和風建築 | 0.1303 | 11 |
| 近代的建築景観系 | 学校、公共施設、工場 | 0.0866 | 15 |
| 公共施設景観系 | 市営住宅、駅、コミュニティセンター | 0.0401 | 16 |
| 交流施設景観系 | 運動、スポーツ施設 | 0.0976 | 13 |
| | 公園、レクリエーション施設 | 0.1815 | 4 |

表1 全調査の概要

| 調査名 | 調査期間 | 調査手法 | 調査員 配布数 | 有効回答数（人） | | |
|------------------------------|------------------------|-------|------------|----------|-----|-----|
| | | | | 男 | 女 | 不明 |
| 景観写真による イメージ再生調査 (1部目) | 平成15年9月1日～9月9日 | 制限連想法 | 1466 | 184 | 204 | 13 |
| イメージ再生調査 (2部目) | 平成15年11月5日～11月17日 | 制限連想法 | 415 | 120 | 144 | 9 |
| マップによるイメージ調査 | 平成15年12月6日～12月23日 | 制限連想法 | 162 | 126 | 0 | 290 |
| 視覚的イメージ調査 | 平成15年12月20日～平成16年1月25日 | 制限連想法 | 1193 | 150 | 0 | 263 |
| 制限連想イメージ調査 | 平成16年3月8日～3月23日 | 制限連想法 | 1103 | 131 | 183 | 11 |
| レクリエーション行動実態調査 | 平成16年2月26日～3月8日 | 制限連想法 | 1095 | 95 | 143 | 26 |
| 遠野市に生息する動植物の認知調査 | 平成15年9月1日～9月9日 | 制限連想法 | 1466 | 184 | 204 | 13 |

激語として41語を選定し、制限連想イメージ調査をおこなった。図1に連想階層図を示す。縦軸は思い付き易さを表すイメージウェイト、矢印は連想の想起関係を表している。

イメージウェイトとイメージの集中数が最も高い「水がきれい」という要素は、遠野市の自然環境を表す重要なキーワードであり、想起関係を考慮して遠野エコミュージアムのテーマを考える際の資料とする。

4. レクリエーション行動について

遠野市民が遠野市においてレクリエーション行動をおこなう場合の、目的・利用施設・滞在時間・移動時間等を把握することにより、遠野市民に適したエコミュージアム活動の目的と範囲を検討するため、パーソントリップ法によりレクリエーション行動実態調査をおこなった。

レクリエーションとして、「美しい自然風景を見る」、「散策・ハイキング」、「山菜採り」などエコミュージアムの理念と近い活動を楽しんでおり、また、場所を見ても、高原、山、川、寺社などエコミュージアム活動に適した場所が複数あげられ、利用されていることがわかる。これより、遠野市においての自然遺産を重視したエコミュージアム計画は、住民のニーズを満たすと考えられる。

5. 動植物に関する意識について

遠野市は、日本の原風景とも評される豊かな自然環境に恵まれているが、専門家によると、近年、気候の変化に伴い生態系に変化が現れるなどの影響が出ているという。自然遺産を念頭に置いたエコミュージアムを考えるうえで、その地域に生息する動植物は重要な要素となる。そこで、遠野市に生息する動植物の現状と遠野市民の自然環境への意識を把握することを目的とし、遠野市に生息する動植物の認知度調査をおこなった。

近年、新聞やテレビで取り上げられることが多い、イヌワシやハヤチネウスユキソウなどの貴重な種類については、若い世代での認知度が高いが、身近に存在する鳥や植物に関しての認知度が低く、知識の継承が必要だと考えられる。

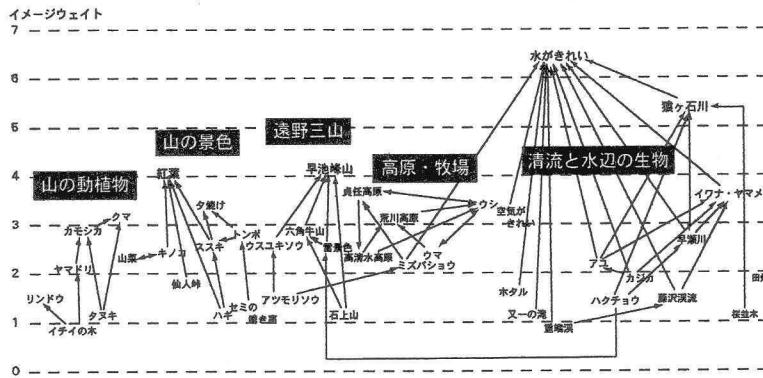


図1 連想階層図

6. 基礎調査のまとめ

基礎調査により得られた要点を以下にまとめる。

- ①伝統・文化に関しての意識は十分に高いが、遠野の自然環境に関して、明確なイメージがなく、情報の提供や学習の機会が十分でない。
- ②遠野市は各地域に独自の地域遺産があるが、その情報が閉鎖的であり、市民が把握しきれていない貴重な遺産が数多く残っている。
- ③遠野市において、現在おこなわれているレクリエーション活動は、エコミュージアムの理念と共通点も多く、自然遺産を重視したエコミュージアム計画は、住民のニーズを満たすと考えられる。
- ④貴重な動植物についてだけでなく、遠野らしさを作り上げている要素である、身近な動植物についての知識も継承していかなければならない。

7. 遠野エコミュージアムの方向性の提案

基礎調査から得られた情報より、遠野エコミュージアムの方向性を考える。

これまで、貴重な動植物の保護活動は、生息地や生態などの詳細な情報を隠すことによって、地域住民が安易に介入しないような方法がとられてきた。これからは、住民自らの力でこれらを保護していくことが、地域社会の発展につながると考えられる。子供等の将来の地域住民に、これら遺産の価値を理解してもらうための機会をつくるため、情報を開示し、学習できる環境を整える必要がある。

地域住民が学習できる環境として、まず、遠野のことに関して知りたいことがあった場合に、その情報の入手方法を一括して把握するエコミュージアム事務局を置く。施設や専門家とそこにある情報を、住民のニーズに応じて提供できるようなデータベースを作成し、情報提供をおこなっていくことが、遠野エコミュージアム計画の第1段階であると考えられる。

日本の原風景と評される豊かな自然環境を活かし、自然遺産を中心に据えた「生物多様性の世界」を彷彿とさせるエコミュージアムを基本

構想とし、図1の連想階層図で示されるグループを、「山の動植物」、「山の景色」、「遠野三山」、「高原・牧場」、「清流と水辺の生物」と名付け、サテライト選定の手がかりとしていく。これらの方向性に沿った遠野エコミュージアム計画を立ち上げるために、今後、エコミュージアムの説明会をおこない住民の理解を得て、PIによる検討会を開催し、基本計画の策定を目指す。